

防災検定 児童が挑戦

高田小 主体的な行動 育てる狙い

災害の仕組みや防災・減災に関する知識などを問う「ジュニア防災検定」に、稲敷市立高田小学校が挑戦した。防災教育の一環で、子供のうちから自ら考え行動する「防災力」を身に付けるのが目的だ。

検定は防災検定協会（東京都千代田区）が2013年から実施。小学校5年程度の初級、小学6年～中学1年程度の中級、中学2～3年程度の上級がある。筆記テストと2度の課題提出を総合評価し、70点以上で合格となる。

高田小は昨年12月、5年生27人が初級を受験した。1回目の課題提出後、40分間のテストに臨んだ。今年に入り、数人のグループや個人で最後の課題として「非常持ち出しグッズ」をイラスト付きでまとめ、校舎内の安全な場所とそうでない場所を図で示した資料を作成。災害の種類を描いたポスターなども完成させた。

検定の合否は今月中にわかる予定だが、近藤大宙君(11)は「地震の時に机の下に潜ることは知っていたが、机の脚を手で持って体を支えることを知った。色々なことがわかってよかった」と納得した様子。担任の小笠原美和教諭(43)は「児童が防災を身近に感じ、具体的な対策を考えるきっかけとなった。保護者からも『家族みんなで防災を考えるいい機会になった』との声をもらった」と話した。

稲敷市教育委員会によると、高田小は高台にあり、児童が災害を意識することは少ない。だが、台風で学校周辺が冠水することもあり、防災意識を高めるため受検を決めた。一人当たりの検定料は2000円は市が全額補助した。

川村満校長は「防災について知識を得るだけでなく、自ら行動する主体性を育てることができた」と意義を語っている。

県内では、土浦市の土浦日大中等教育学校も1年生110人が昨年12月に中級を受験した。